

概要

私たちの住む街なかの「魅力資産」の再発見とユニーク活用アイデア（北区・西区）

栗本 善博、小林 俊英、小山 美保、汀 一郎

我々は“まちの使い手たる市民”を代表し、「保存再生アプローチ」において名古屋市の実りある「まちづくり」活動に参画していくこととする。我々の目的は同北区・西区に存在する魅力ある歴史文化資産の再発見と広報に努めていくことである。具体的には「庄内用水」および同用水と地理的接点の近い旧街道・河川に広く焦点を当て、同沿線に点在する歴史文化資産を「郷土の財産目録」という形で集約させ、当該資産を活用した「まちづくり」活動のあり方について提言を試みようとするものである。

以下、我々が集約した「郷土の財産目録」の編集概略について簡潔に著していくこととする。

第1章では「庄内用水」をとりあげた。庄内用水は、通称惣兵衛川そうべえがわとも呼ばれている。これについては、余り知られていない向きもあるが、西・中村区境に架かるJR高架橋の銘版には確かに「惣兵衛川架道橋」と列記されていた。

この「庄内用水」路は、庄内川の元杵樋門に端を発し、矢田川を潜り上飯田より北区を真西に貫き、北・西区境辺りから南よりに流れを変え、東枇杷島のスポーツセンターを経由して中村区・中川区・港区、やがては名古屋港へと注いでいる。総延長28kmにも及ぶ農工業用水であり、今回の調査対象区間である北・西区の間だけでも、約6.5kmもある。現在の水路に近い形になったのも約400年とその歴史は古い。

我々は、北区上飯田の取水口から用水路沿いの史跡等を探索しながら、西・中村区境まで歩いた。この庄内用水はかつて灌漑用水としても活躍していたという。その証拠に数は少ないながらも、沿線各所には水田が見受けられ、中村・中川・港区においては、未だにこの用水の恩恵を被る田畑が数多くあるという。また児玉浄水場からの取水分については工業用水として需要されており、今もなお沿線産業には欠かすことのできない存在であることはいまでもない。しかしそれらの一方で、拡大する都市化の影響なのか宅地化のために水田を埋め立てている光景も見受けられた。庄内用水の今後の行く末を憂慮せざるを得ない現実でもある。

庄内用水にも四季の魅力がある。春には桜が咲き乱れ、夏は緑陰をつくり市民の憩いの場所となっている。また流域には数多くの神社仏閣が点在する。それらを参詣しながらの散策も魅力のひとつであろう。昭和58年から始まった「庄内用水環境整備事業」により沿線の遊歩道・散歩道等はより整備され、沿線住民の憩いの場所としてその魅力は増すばかりである。いずれにせよ、いつまでも残したい魅力資産であることには変わらない。

第2章では「庄内用水」と水源を同じにする「御用水・黒川」をとりあげた。

この「御用水」は、寛文3年（1663）名古屋城の内堀に庄内川の水を引き入れるために掘削されたが、明治9年（1876）に御用水に並行する形で「黒川」が切り開かれるとやがてその必要性を欠くようになり、昭和47年に埋め立てられた。

北東部の夫婦橋から南西部の猿投橋までの約1.7kmの区間が遊歩道・散歩道として生まれかわった。水がわれわれの生命維持のために不可欠であること、ならびに暴れ川とさえ、異名をとっていた昔の「庄内川」の治水のために当時の施政者が努力されたこと等に思いを馳せながら調査活動を試みた。

第3章へはこの地域の主要街道として「美濃路」をとりあげた。

「美濃路」は名古屋市内を大きく南北に貫いている街道で、熱田の宿からの船路を嫌った旅人が、岡路として拓いた街道であると聞く。今回の調査対象区域としては、西区内の美濃路であり、東枇杷島の庄内川より名古屋城にいたる沿道を往時の旅人の気持ちを抱きながら一路東進（直線距離約3km）し、界隈の史跡を探索した。この街道にはこの地方独自の信仰である「屋根神様」が存在するのだが、月例祭そのものが影を潜めるなど、いにしへの風情がなくなりつつあるのに一抹の寂しさを覚えた。さらに、この街道沿いにはかつてたくさんの銭湯が存在したというが、生活様式が大きく変貌を遂げたためか、廃業した銭湯も多々散見された。かつては「銭湯談義」が地元住民のコミュニケーションの術であっただけに寂しい現実を目の当たりにした。

第4章に「稲置街道」をとりあげた。「稲置街道」は、木曽街道・犬山街道・本街道・小牧街道とも称せられ、木曽方面に通じる主要街道であったが、現在はその殆どが寸断されおり一部が残るのみとなっている。往時は木曽の御料林への巡検街道となっていたほか、領民の「木曽御嶽登拝」や「信州善光寺参詣」への街道としても多いに賑わっていたという。名古屋には一部しか現存しないが、「江戸時代を彷彿させる街道」として印象に残った。

第5章に「岩倉街道」をとりあげた。「岩倉街道」は、その名の通り岩倉を經由して、犬山へ抜ける街道であった。当初は、尾張藩管内各戸の台所を潤していた青物類の集散場であった枇杷島橋のたもとへ、北部地域からの物資を運ぶために拓けた道路と聞く。

この地にも、名古屋市の住宅街としての都市化の波がひたひたと押し寄せ、僅かに、善光寺別院周辺の「町並み保存会」指定地域にその面影が残されていた。

以上、第5章に取り上げた以外にも、諸所方々を探索した。主だったものは下記の通り。

大曾根・柳原・弁天通り・円頓寺等の商店街
山田の庄（山田天満宮、金神社、矢田川伏越樋等）
洗堰（大我麻神社、楠西堤、喜惣治新田、蛇池、新川洗堰等）
楠の里（大井神社、瑞応寺、岳桂院等）
志賀公園、平手政秀宅跡、多奈波太神社、西来寺、綿神社等

城下町（鳴塚、菊水寺、豊田自動織布工場跡、地藏院、金刀比羅宮、多賀宮等）
四間道、屋根神様、子守地藏尊、浅間神社、川伊藤家、
堀川（五条橋、中橋、伝馬橋等）
名古屋城周辺（堀川堀留の碑、辰ノ口水道大樋、筋違橋等）
平田砦（平田城跡、泉増院、楽音寺、十所社、白山社等）
大乃伎（津島社、薬師寺、陽岳寺、福昌寺、大乃伎神社等）
庄内緑地
この地方に残されている民芸・芸能、神社・仏閣の祭礼
その他

最終章となる第6章では、当該調査地区におけるまちづくりに対し、今回の現地調査をふまえて我々なりの提言を作成した。